

タイ国における少数民族モン（Mon）をめぐる文化継承と社会関係についての 文化人類学的研究

平成 23 年編入
派遣先国：タイ国
和田 理寛

キーワード：民族，国民国家，越境労働者，宗教実践，社会関係

対象とする問題の概要

本研究が対象とするモンと呼ばれる人々は、現在のタイとミャンマーの 2 国に分布する少数民族である。モンは東南アジア大陸部において早くから仏教を受容し、タイやビルマなど現在の主流民族に先駆けて文明や王国を築いた人々として知られている。また、ビルマ文字がモン文字を母体として作られたように、当該地域の諸民族に少なくない文化的影響をもたらしたと考えられている。そのため、タイやビルマの伝統文化や歴史を考える上でもモンは重要な存在であるが、特にモン語を用いた人類学的研究はそれほど多くなく、今後モン研究のさらなる発展が望まれる。さらに、言語学的にはモン語はタイ語やビルマ語と異なる語族にあり、カンボジア語などと同じモン・クメール語族に属すとされる。こうしたモンについての研究を進めることは、タイ研究、ミャンマー研究、カンボジア研究などの一国研究を超えた新たな視点から東南アジア大陸部を捉え直す可能性を有している。

研究目的

本研究は蒙の伝統文化や社会について現代的变化を視野に入れながら明らかにすることを目的とする。タイ国のモンは法的にタイ国民として生きる中で近年急速に同化が進み、モン語や文化をどのように次世代に継承するかが目下の課題となっている。そうした中、ここ 20 年ほどの間にモン語を母語とするミャンマー出身の蒙の若者が単純就労の外国人労働者として大量にタイ国に流入してきた。先行研究はこうした越境労働者を法的地位から扱ったものがほとんどであり、独自の社会関係や文化的活動に注目した研究は少ない。例外として、著者自身がモン系タイ人であるスガンヤーの論文はモン人越境労働者の民族記念日やモン語教育に焦点を当てた先駆的研究として注目される。本研究はこのスガンヤー論文を発展的に継承し、モンであることと法的地位との二重の「民族」的属性が交錯する現代的事象に注目しながら、モン文化と社会の過去と現在について記述・分析する。

フィールドワークから得られた知見について

調査方法はタイ国内のモン系仏教寺院に住み込み、寺院の仕事などを手伝いながら知見を深める参与観察と呼ばれる手法を採用した。その結果、インタビューとは性格の異なる成果を得ることができた。

早朝、僧の托鉢に同行すると、タイ国籍者に混ざってミャンマー出身者と思われる人たちが食べ物を寄進している。タイ国籍者は中高年の者が多いが、ミャンマー出身者には 10 代 20 代の若者の姿も多く見られる。タイの若者と異なり男女共に腰巻を纏い、寄進後に経を受ける際は必ず地面に座るため、ミ

ヤンマー出身者だと分かる。こうしたミャンマー出身者の多くはモンであると推測される。

仏教寺院の仕事を手伝うのもタイ国籍者に留まらない。多くのミャンマー国モンが寺院の建設や儀礼の準備などに携わっている。ただし、食事をするときなどちょっとしたときに両者が別々の輪を作っていることもしばしばある。

また寺院での仏教儀礼にも変化が生じている。9月には舟の形を模したところに菓子などを供える儀礼が行われ、10月の出安居後の托鉢儀礼では若者グループが主体となった食事の提供所が多く設けられたが、これらはタイ国モンには見られない実践であり、地元民をはるかに上回る数のミャンマー出身モンが儀礼に参加していた。さらに若者グループは出身村だけでなく、タイで普段関わりのある寺院、職場の同僚などを単位としていることが新たに分かった。

このように2国のモンの間には国民と外国人労働者という断絶が紛れもない事実として横たわる中で、モン系タイ人の多い地元民はミャンマー国蒙の宗教実践を事実上容認しており、仏教寺院という社会的・物理的空間を介した両者の新たな関係性が窺える。この両者の関係に焦点を当てることは、モン人越境労働者を政策の受動的な存在に限定することなく、彼らの能動的な宗教実践に注目し、さらにモン文化と社会の新たな展開を明らかにする上で有益な事例となりうる。



9月、舟に菓子などを備える儀礼（前夜）



10月、出安居翌日の托鉢儀礼に参加する
ミャンマー出身のモン



11月の儀礼「筏流し」のための準備を進める
ミャンマー出身のモン

今後の展開・反省点

今回は短い調査期間であったため、ミャンマー国モンが参加する仏教寺院における年中儀礼のうち実際に参与観察ができたのは2回だけであった。このほかにも、筏流し、陽暦新年、モン僧による三蔵経典音読、民族記念日、水掛祭り、入安居などの年中儀礼があり、年間を通して調査する必要がある。また、親族、民族、同郷者、タイで普段関わる寺院、職場の同僚など、タイ国内においてミャンマー国モンが形成する社会的ネットワークの実態についても調査途中である。

さらに、今回はタイ国モンについて詳しい調査ができなかった。調査地では若い世代を中心に文化的同化がかなり進んでいると思われるが、その現状の把握とともに、伝統的なモン社会や文化を理解するためには未だモン文化を色濃く残すタイ国モンの地域も調査対象に加える必要がある。そのうえで国民国家形成と越境という2つ大きな社会変動について、モンという少数民族の置かれた状況から再考したい。

参考文献

Sukanya Baonoed. 2006. *Identity Formation of Mon Migrants: A Case Study of Transnational Workers in Samut Sakhon Province*, [Bangkok]; M. A. Thesis, Faculty of Political Science, Chulalongkorn University (タイ語) .